

まえがき

たまさか葬儀などに参列する事があります。たいていは故人の事は良く知らず、義理だけで参列する訳ですが、それでも喪主の方にお悔やみの一つも申し述べなければなりません。

「この度はまことに御愁傷様でございます。さぞかし……。突然のことで……。どうぞお力落としのなきように……」

なんて感じで所々は聞き取れるものの、大半は口の中でもごもご何と言っているのか判らない位で丁度良い様であります。

こんなやり方も誰に教わった訳でもなく、何の事はありません落語の中に出てくる科白せりふから覚えた事であります。ちよつとした生活の知恵から、人の心の裏表、人間としてのあるべき姿から雑学と、実に様々な事柄が落語から学べるものだと思います。

何も落語に限った話ではありません。人の生き方、立居振舞いに影響を与えますのは、立派な哲学の書やら倫理の教科書などよりも落語、浪曲、講談、歌舞伎、大衆演劇、流行歌などの主人公の言動の影響が大きい様な気が致します。誰もがかつこ良く、スカッと、気持ち良く生きたいものですが、中々簡単にそうはいかないのが現実であります。そんな主人公達と同じ様にやっていましたら、命がいくつあっても足りませんし、身代ももちません。誰もが「天野屋利兵衛」に「吉良の仁吉」に「沓掛時次郎」に「駒形茂兵衛」に「高倉健さん」になれる訳ではありません。しかし肝心なのは即座に出来るか出来ないかなのでは決してありません。業界では有名な神奈川県川崎市宮前区の二輪車販売店Y儀の社長の言によれば、「大切なものはものの考え方、つまり考えの方向性なんだよ。バイクだって進む力と遠心力とのベクトルの結果として前進するか、倒れるか決まるんだ。考えた事、思った事が百パーセント実現出来る訳はない。しかし何を望むのかの方向性だけはしっかり持っていなければそれはただ流されているだけ」だそうであります。まあそんな人の生き方に影響を与える様な立派な事から、現代の我々では知り得ない事、知らなくても良いが知っていると何か偉くなった様な気分になれる事、そんなこんなを四十八話ピックアップしました。そしてその嘶の中の極め付きの名科白を嘶のままで抜粋致しましたので、江戸落語の神髄もお楽しみ頂ける趣向となっているつもりであります。先人の方々には御意見を頂き、同年輩の団塊世代には共感を頂き、より若き人々には何やら今後の人生の参考にでもなればよかれと、存じます。

そんなにお時間は取らせませんので、せちがらい憂き世からちと離れ、落語の世界で楽しんで頂くのも一興かと愚考致しますがいかが。志ん生師によれば、「こんな事学校じゃお教せえません」だそうであります。

目次

まえがき

第一節 人情の機微——口で言っても心の中じゃ

- 一 火事息子 家を飛び出た道楽息子、実家のピンチに、さあどうする…… 10
- 二 親子酒 親子して誓った禁酒、さてその結末は…… 14
- 三 桃太郎、真田小僧、初天神 しっかり息子にのんびり親父…… 18
- 四 六尺棒 放蕩息子に怒れる親父…… 21
- 五 百川 どじ拵えでやって来ましたのは、さて…… 25
- 六 味噌蔵、山崎屋、百年目 番頭さんといっても所詮は中間管理職…… 28
- 七 水屋の富 持ち慣れない大金に周章狼狽…… 32
- 八 子別れ しっかり息子、鎚となる…… 35

- 九 替り目 お多福だ、化けべそだと口では言ってみたものの…… 39

- 十 お直し 惚れた女房を遊女にして、亭主はボン引き…… 42

- 十一 風呂敷、紙入れ 町内で知らぬは亭主ばかりなり…… 45

- 十二 芝浜 思いがけずに手に入る大金。その時亭主は、女房は…… 48

- 十三 宮戸川、死神、締め込み 好いて好かれた二人でも日が経つと…… 52

- 十四 厩火事 女房の稼ぎを頼りの遊び人…… 56

- 十五 甲府い 志を立てて、故郷を出て…… 60

- 十六 佃祭 女房が妬くほど亭主でもせず、とはいうものの…… 64

第二節 三道楽煩惱——こればかりは止められません

- 十七 禁酒番屋 殿の御沙汰といえども出来ない事も…… 68

- 十八 夢の酒 冷酒でも飲んどきや良かった…… 72

十九	ひとりざもり 一人酒盛	お前と飲みたいのか、お前の目の前で飲みたいだけなのか……75
二十	盃の殿様	殿さん浮気すると聞きまへんよ……78
二十一	狸賽	これさえあれば、勝つこと間違いなし……84
二十二	明烏	初手はなんでも恥ずかしいものですが……87
二十三	二階ぞめき	これぞ本当の生活習慣病でしょうか……91
二十四	酢豆腐	町内の若い衆、寄つてたかつて……95
二十五	唐茄子屋政談、舟徳、湯屋番	道楽の果てはこんなところでしょう……98
二十六	三枚起請	遊女の稼ぎのテクニク……104
二十七	お茶汲み	遊女のテクニクその2。ちょっと知能犯であります……108
二十八	五人廻し	同時に複数の客と契約するのは吉原だけの習慣でした……112
二十九	付き馬、突き落し、居残り佐平次	銭はないけど遊びたい……117
三十	文違い	騙し、騙され男と女……125

第三節	冠婚葬祭	これに駆け付け、三杯飲める
三十一	子ほめ、牛ほめ	誉め方次第で一杯飲める……130
三十二	鮑熨斗	片貝だからつてめでたいもなんだ……134
三十三	子別れの枕(円生)、佃祭	知っておきたい吊いの作法とタブーの因縁……137
三十四	黄金餅、らくだ	吊いというより単なる死体処理……141

第四節	出処進退	男と女の意地と張り
三十五	高尾太夫	遊女といえども矜持あり……146
三十六	幾代餅の由来、紺屋高尾	そこまで思つてくんなんすなら……150
三十七	おせつ徳三郎	この世で添えない二人なら、あの世とやらで添い遂げましょう……155
三十八	三方一両損	意地と意地とのガチンコ勝負……160

三十九

文七元結 金で買える命はねえんだ…… 163

四十

たがや 一寸の虫にも五分の魂…… 168

四十一

猫久 たとえ猫と呼ばれる人でも退けぬ時もある、その時女房は…… 172

四十二

柳田格之進 武士の一分か、人の情けか、どうする柳田格之進…… 175

四十三

蔵前駕籠 追剥たつて、何も出ると決まったもんでもないんだろ…… 180

四十四

井戸の茶碗 武士の魂は捨てられません…… 184

第五節 雑学——何の役にも立ちません

四十五

やかん 由来を川中島の戦あたりに求めた頃から話がおかしくなります…… 192

四十六

二十四孝 親孝行、したくなくても親があり…… 196

四十七

稽古屋 狙いは師匠か色事か…… 202

四十八

鈴振り 僧といつても男は男、無理は止そうよ…… 207

第一節

人情の機微——口で言つても心の中じや

一 火事息子^{かじむすこ}

家を飛び出た道楽息子、実家のピンチに、さあどうする

三道楽^{さんどらばんのう}煩惱と申しまして一般に道楽の三大流派といえますと、飲む、打つ、買う、でありますが無もそれに限ったものではありません。最近では何とかマニア、何フエチ、何オタクとか申しまして極めて特殊な趣味に^こ昂じていらつしやる方も多々おられます。

確かに三道楽は間違いなく大人の領分でありまして、現在の子供達の道楽といえますか趣味の代表となりますと、乗り物、怪獣、昆虫などといったところですが、通常これらの症状は思春期を迎える頃になりますとめでたく消滅致しまして、大人の三道楽に昇華するものです。

しかし昨今の成人の幼児化現象を反映したところなのでしょうが、子供の頃の趣味を引きずったままなり形だけは大きくなってしまった方々が増加している様です。四十、五十、六十と出来の悪い重箱みたいに歳ばかり重ね、未だに捕虫網を抱え山野を駆け廻ったり、竿の先に針の付いた糸をぶら下げ必要もなく魚類を捕捉したり、はたまた鉄ちゃん鉄子と名を変えての列車狂の人々とか漫画オタク、秋葉オタクを自認する元首相など枚挙に^{いとま}暇がございません。

マア人間他人に迷惑をかけない限り自由なのですから、文句のつけ様もございませんが、何につけ程^{ほど}というものが必要なのは趣味、道楽に限ったものではありませんからして、くれぐれも御用心を。

火事が好き、火が燃えるのが好きだからと、火を付けて廻ったりしたらこれは重罪であります。しかし

この火を見るのが好きという性癖は人間が火を使い始めた頃から人類生存の為の絶対条件であつたそうです。何故ならば火の嫌いな人間は必然的に生き残れなかつたからだそうです。

昔だつたら半鐘^{はんしやう}のチャーンという音、今なら消防自動車のサイレンを聞いたらいともたつてもいられないという人は確かにいらつしやいます。火事の現場に最も近く長くいられるのは消防士であり、その消防士になる為には大型自動車免許が必要だと、学生時代にバイト代を大型自動車免許取得の為に注ぎ込んだ人も実在します。

神田の質屋伊勢屋の一人息子の藤三郎、これが火事が何より好きであります。出入りの^{かしら}鳶頭に町火消に入れてくれと頼みますが、取り合つてくれません。それならば四十八組ある町火消、どこかで組に入れてくれるだろうと廻つてみますが鳶頭から廻^{かいじやう}状が出されておりましたから、どこの町火消でも断られてしまします。

それでもどうしても火消しになりたくて公儀の火消し屋敷の人足、俗にいう臥^{がえん}煙となりました。町火消しと違ってこの火消し屋敷は大名や旗本の屋敷専門で、臥煙は公儀の威光を笠に着ての好き勝手な振舞いのならず者集団、世間の嫌われ者でありました。

首、手首、足首の先以外全身に彫り物をし、法被^{はつぴ}一枚、禪^{ぜんじ}一丁で火事場に飛び込んでいく荒くれに本人は大満足でありましたが、世間様、親戚筋の手前もあつて堅気の質屋の息子にしておく訳にもまいりません。やむなく勘当に致しましたが、それを良い事にしてか本人全く家に寄りつきませんでした。

冬もこれから本番の十一月の二の酉^{とり}の日、九つ前(十二時頃)日本橋から火の手が上がりました。北風

が大変強く出入りの左官屋に蔵の目塗りを頼みましたが、神田は風上なので多分大丈夫、それより日本橋のお得意の方に廻りたいので勘弁してくれとの返事でありました。

人様の物を預る質屋稼業、いくら風上でも目塗りの真似事でもしておかないと今後の信用問題と、高い所が苦手という番頭と手代達が見よう見真似の左官仕事ですが、上手くいく筈ありません。

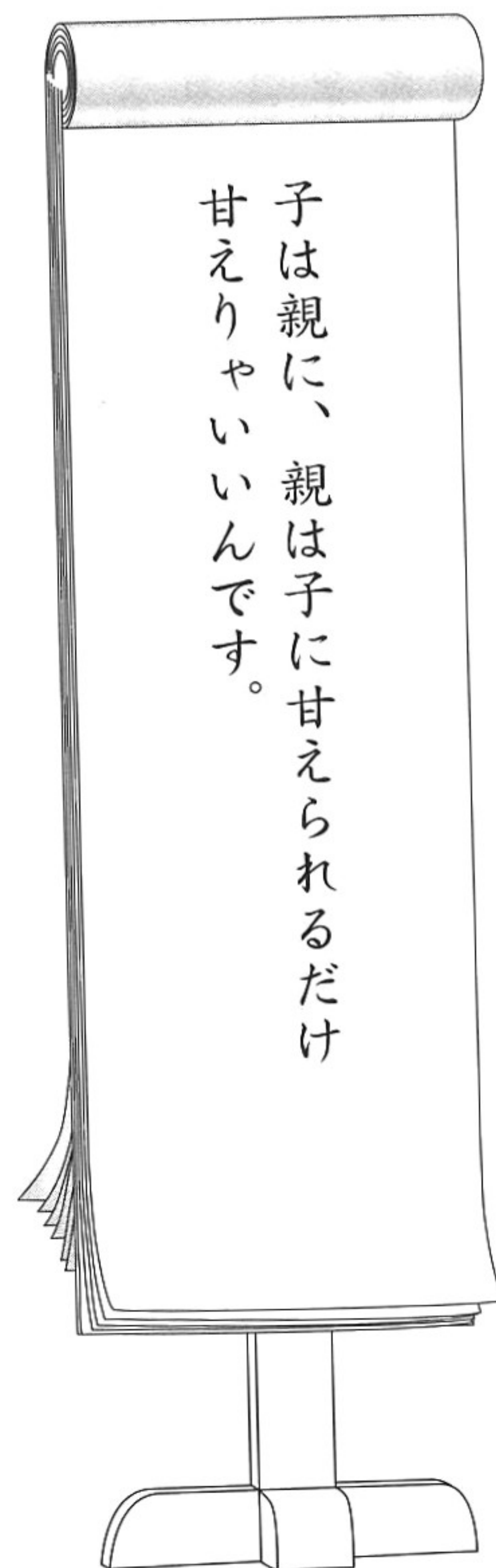
そんな様子を遠くから見ていた一人の男、全身唐獅子牡丹の彫り物が燃え上がる様な良い男、屋根に駆け登ったと思えば猿ましらの如く飛び移り、伊勢屋の蔵の上で悪戦苦闘している番頭を助け何とか目塗りの格好をつけてくれました。

火事も神田に延焼する事なく収まり、次々と見舞い客が訪れその応対に追われる主人に番頭が、先程助けてくれた人が台所に控えているから是非挨拶だけでもしてやって、と頼みます。何も主人の私がそこまですと渋りますが、番頭が余りに強く請いますので、へっつい横にうずくまる法被一枚の男を見ればこれがあの勘当した息子でありました。

ぎこちない親子の挨拶もそこそこにその場を立ち去ろうとする息子を押し留め番頭は母親を呼んでまいります。変わり果てた姿とはいえそこは親子です。一目で息子と知れます。

「まあまあ、寒そうな格好をして、お前にゃあの結城が良く似合ったねえ。今でも蔵に行ってお前の着物を見ると胸が一杯になって。小遣いにも困ってるんじゃないか、ちゃんと御飯も食べているのだろうか、心配で心配で」

「そんな心配をこの馬鹿野郎の為にする事はない、着物でも小遣いでもそんな物は道端に放り出せ、そうすりゃどこかの馬鹿が拾って行かあ」



子は親に、親は子に甘えられるだけ
甘えりやいいんです。



花魁道中の図。太夫や格子女郎といった格の高い遊女は揚屋から呼んだ。遊女屋から仲の町を
通って揚屋まで行くことを道中を称し、禿（見習い遊女）、新造（若手遊女）、遣り手（遊女OG）、
若い衆（男の使用人）を引き連れ、夜具、化粧道具などを携え、八文字を踏んで揚屋入りしました。
（喜多川歌麿『青楼年中行事』）



落語で辿る江戸・東京三十六席。

林 秀年 著

■定価:本体1600円+税

■A5判並製/272ページ

「目黒のさんま」「品川心中」など有名な古典落語から36作品を選び、噺のあらすじはもちろんのこと、古典落語によく登場する、吉原をはじめとした江戸文化についても当時の図版を用いて解説。また、噺の舞台となった場所を著者自らが訪ね歩き、現在どうなっているのかも写真つきで紹介。大きめの活字で読みやすさに配慮。

略歴 林 秀年（はやし ひでとし）

昭和二十四年疎開先の埼玉県浦和市生れ。

昭和三十年東京都渋谷区に転居。

明治大学法学部卒業後平成十六年まで信販会社に勤務。

落語との出会いは小学生の頃、年長の従兄の顔パスの尻馬に乗って入った新宿末広亭。ここを皮切りに有楽町の東宝演芸場、内幸町のイイノホール、渋谷の東横落語会、新宿の紀伊国屋ホールなどに通い、落語の魅力を知り関心を深めた。

現在は飲食、睡眠、放浪、妄想を趣味とし、無欲、無思想、無宗教の三無主義に依る人間解放を目指し、切磋琢磨の日々を送る。

落語で知る人生の知恵 江戸時代の礼儀作法と心意気

著 者 林 秀 年

発行者 小林 謙一

発行所 三樹書房

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町一―三〇

電話 〇三(三二九五)五三九八

<http://www.mikipress.com>

※無断転載禁止

印刷所・製本 中央精版印刷株式会社

※本書の一部あるいは写真などを無断で複写・複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利の侵害になります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版權管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。